

第42回国語分科会日本語教育小委員会・議事録

平成23年12月13日（火）
10時～12時
旧文部省庁舎5階 文化庁特別会議室

〔出席者〕

（委員）西原主査，杉戸副主査，伊東，井上，岩見，尾崎，金田，小山，佐藤，嶋田，
中野，西澤委員（計12名）
（文部科学省・文化庁）舟橋国語課長，鶴飼日本語教育専門官，仙田日本語教育専門職，
山下日本語教育専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第41回国語分科会日本語教育小委員会・議事録（案）
- 2 教材例集について（案）
- 3 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の能力評価について（報告書の全体構成のたたき台）
- 4 能力評価に関する基本的な考え方の論点整理
- 5 能力記述について
- 6 ロールプレイタスク例
- 7 能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）

〔参考資料〕

- 1 日本語教育小委員会における検討内容とそのスケジュール

〔机上配布資料〕

- 1 国語分科会日本語教育小委員会における審議について—今後検討すべき日本語教育の課題—
- 2 国語分科会日本語教育小委員会における審議について—日本語教育の充実に向けた体制整備と「生活者としての外国人」に対する日本語教育の内容等の検討—
- 3 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について
- 4 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 活用のためのガイドブック
- 5 能力評価に関するヒアリングの取りまとめ

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認があった。
- 2 前回の議事録（案）が確認された。
- 3 事務局から配布資料2「教材例集について（案）」について説明があり，教材例集の趣旨や位置付け等の説明文について意見交換を行った。
- 4 事務局から配布資料3「能力評価に関する基本的な考え方の論点整理」，配布資料4「能力評価に関する検討の成果物について（たたき台）」，配布資料5「能力記述について」，配布資料6「ロールプレイタスク例」，配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」について説明があり，能力評価について意見交換を行った。
- 5 次回の日本語教育小委員会は1月12日（木）10時から12時まで文化庁特別会

議室で行うことが確認された。

6 質疑応答及び意見交換における各委員の意見は次のとおりである。

○西原主査

定刻となりましたので、文化審議会国語分科会日本語教育小委員会の通算で42回目、今期6回目を始めます。

前回日本語教育小委員会から本日までの間に第31回日本語教育小委員会ワーキンググループを一度行いました。第31回日本語教育小委員会ワーキンググループでは、配布資料2「教材例集について(案)」の特に「1. はじめに」の書き出しの部分とレイアウトについて検討を行いました。配布資料2「教材例集について(案)」について、2ページ、3ページ、それから、4ページ、5ページのところが先回の日本語教育小委員会の委員の皆様方の御意見を伺った上で日本語教育小委員会ワーキンググループで検討し、修正したものを示しております。特にこの赤字の部分の修正等について、特に御意見がありますでしょうか。

○岩見委員

5ページの修正について「指導者」「協力者」についてこのように定義されたのでいいと思います。それに関連して、「指導ノート」の文中にまだ「支援者」という言葉が使われていたりしますので、その辺りの整合性についてチェックする必要があるだろうと思います。

○西原主査

分かりました。ありがとうございます。では、配布資料2「教材例集について(案)」の中身について、赤字部分で追加されたことに矛盾するようなものが更にあるようでしたら、それはできる限り「指導者」及び「協力者」という用語に統一するということですね。ありがとうございました。

段々と最終的な形になっていきまして、恐らく配布資料2「教材例集について(案)」について御覧いただくのが最終になると思います。そういうことだと、255ページのフットノート、脚注の「2」のところに、「平成24年1月を目途に取りまとめの予定」と書いてしまっておいてよろしいタイミングなのでしょうか。

○山下日本語教育専門職

ここは少しまた検討いたします。

○西原主査

これは本日の段階だとこういう表現になるということですね。

○山下日本語教育専門職

そういうことです。

○西原主査

ここは進捗状況によっては「取りまとめた」になるかもしれないということですね。

○山下日本語教育専門職

はい。

○西原主査

それから、「3」の下に「…」と印が入っており、以下続くということになっておりますけれども、この「…」もこのままいくのでしょうか。255ページのところです。

○山下日本語教育専門職

この部分につきましては、これは日本語教育小委員会ではなく日本語教育小委員会ワ

ーキンググループで出された意見だったと思うのですが、能力記述の活用の仕方というのはどんどん広がる、ここで取り上げているものだけではないという意見が出ていたので、それを反映させたものです。ですので、今は残すということで考えています。

○西原主査

はい。分かりました。それから、256ページの事例と能力記述のうち、最初のカリキュラム案に載っていた報告書から加えられたところが赤字になっていますけれども、この赤字もこのまま赤でいくのでしょうか。

○山下日本語教育専門職

これはこれまでは検討用ということで赤にしています。

○西原主査

検討用で赤字が付いているということですね。

○山下日本語教育専門職

はい。最終的にどういう形になるかということについては決まっていなかったと思います。

○西原主査

そうですね。ホームページから標準的なカリキュラム案を見ることができますので、そのときの能力記述と「違っているじゃないか」ということになったときに、今回追加されている部分が赤字になっていると、よりはっきりはします。何故、ここに赤字があるのかというようなことを含めて書いておくということでしょうか。これについては赤字のままがよいか、黒字に戻した方がよいかという形式的なことで御意見をいただきたいと思いません。

○金田委員

赤で残すかどうかということについて、赤であることによって何かほかよりも目立つ効果も出てきてしまいます。前のものと違うということを示すために新しい部分を赤くするという点に関しては少し疑問を感じます。

○西原主査

赤字にしない方がよいということですね。

○金田委員

ただ、やはり前に公開されたものと今回の能力評価に関する報告書に載せるものが違うということは、常に分かるようにしておく必要があります。ですので、例えばどこかにこれは「バージョン2」であるということが分かるような何か一本当に「バージョン2」でも何でもいいんですけどもーオリジナルのものに修正を加えたものだとか、あるいは加筆されているということが一言で分かるようになっていけばいいのかなという気がします。

○西原主査

そうですね。そうすると、配布資料2「教材例集について(案)」の「3.2」のところの256ページの一番上で、標準的なカリキュラム案で取り上げている生活上の行為の事例と能力記述となっているので、これはここで単に「バージョン2です」と言えばいいことなのではないでしょうか。

○杉戸副主査

配布資料5「能力記述について」にも同じものがあるわけです。色のことについて意見を言わせていただくと、私も追加した部分を赤にしない方がいいと思います。配布資料5「能力記述について」の見出しのすぐ下の「※」に太字、下線、斜体について「標準的な

カリキュラム案で取り上げている能力記述に追加したもの」ということが書いてあります。それは下線や斜体、太字などの字体で区別するということはやるけれども、それについても配布資料2「教材例集について（案）」の能力記述の部分にあるように「※」の注もつけた方がいいと思います。

○西原主査

それでは、何らかの形の工夫で配布資料5「能力記述について」のような形にするというのも一案であるということでしょうか。

○杉戸副主査

はい。

○西原主査

段々と最終バージョンに近くなっておりませんが、それでよろしいでしょうか、いかがでしょうか。

○杉戸副主査

細かなところに更に入ると、配布資料5「能力記述について」の目立たせ方は、追加した方が目立ちますが、それは逆ではないかと思えます。カリキュラム案の本来のもの、もとのものを目立たせて、追加したものを少し控えめに示すというのが、流れからすればいいのではないかなと思えます。その意味で、この「※」の文章も「取り上げている能力記述に追加した」ではなくて、「取り上げていない能力記述を追加したもの」とした方が分かりやすいですし、流れの趣旨にも合うかなと思えます。

○岩見委員

使い勝手としては、いかがでしょうか。今回のこの教材例集だけを見る人もいますよね。

○西原主査

いると思えます。また、それなりに多いと思えます。

○岩見委員

その場合に能力記述は「これこれ、こういうために使いますよ」ということが書いてあり、前回、例えば学習したいもの、それから、コースで取り上げるものとして、これを参考資料の一つとして使うことができるということですよ。

○西原主査

そのことが配布資料2「教材例集について（案）」の255ページは、「学習者にとって、自分でやりたいことのチェックなどができますよ」となっています。

○岩見委員

そうすると、これは別のところに「カリキュラム案」で取り上げたものと違うということが記述されていれば、ここは色は同じでもいいのかと思えます。それに赤い部分について、翻訳はありませんよね。

○西原主査

はい、そうです。

○岩見委員

翻訳を付けた形で載せると、そのような目的に使えるということが一つあると思えます。

○西原主査

それはいかがでしょうか。実は最初の標準的なカリキュラム案は、この部分、多言語にも翻訳してあります。標準的なカリキュラム案の12ページ、13ページの部分です。

○岩見委員

全部ではないですね。

○山下日本語教育専門職

生活上の行為の事例のところまでは、カリキュラム案の12ページ、13ページで取り上げているものについては、多言語になっているものがございますが、能力記述については多言語での翻訳は一切ない状態です。

○西原主査

そうですね。

○岩見委員

能力記述については多言語版はありませんね。

○西原主査

いかがでございましょうか。色は同じにするということによろしいでしょうか。そして、「3.2」の取り上げている生活上の行為の事例と能力記述のところに注を付けるということと、それから、杉戸副主査の御意見では、追加した方を薄くするのがいいということです。岩見委員は違うことでしたよね。そこは何も違いをもたらさなくていいのではないかという御意見でした。

○岩見委員

そうですね。対照して見る人もいるのでしょうか。いるとすれば対応が必要ですが、いなければそこまでしなくても…。

○西原主査

教材例だけを見る人は別に対照も何もしないですよ。

○岩見委員

今回、新たに追加したものについて、何か丸を付けてもいいですけど…。

○西原主査

カリキュラム案のところを知っている人は、「うーん」と思うかもしれないですが、どちらでしょうか。

○岩見委員

必要ないという気がします。

○嶋田委員

ユーザー側から見ると、前とどのように違うかということよりも、とにかくこの項目でできることが求められているわけですよ。これを使って何を指導すればいいかということが大事だと思います。ですので、私はむしろ全部色は一緒にいいのではないかと思います。審議会の報告書として、これまでの成果物との区別を付けることがどうしても必要だとすれば、「※」などを何か付けるのでよいのではないのでしょうか。「何となくここはこうなんだ」ということが分かる程度で、別にアンダーラインを引いたりとかはしなくてもよいのではないかと思います。

○西原主査

ユーザーからすれば、分からなくてもいいかもしれないですね。

○嶋田委員

私はもちろん分からなくていいと思うのですが、どうしても必要ということであれば、本当にその程度の印を付けていけばいいのではないかと思います。その程度で十分で、私も岩見委員と同じで、付ける必要はないと思っています。

○西原主査

はい。ただし、タイトルのところに説明を付けるということですね。

○嶋田委員

はい。説明をしっかりと付けたいと思います。

○西原主査

杉戸副主査，そのようなところでよろしいでしょうか。

○杉戸副主査

はい。

○西原主査

では，そういうことにさせていただきますが，ほかに体裁等について御意見がありますでしょうか。配布資料2「教材例集について（案）」の255ページはほとんど1ページ新たに書き足した部分です。

○金田委員

少しお伺いしてもよろしいでしょうか。配布資料2「教材例集について（案）」の256ページ以降の部分について，新しく加えたところに関しては文言等もまだ全然検討していません。日本語教育小委員会ワーキンググループでも十分に検討していなかったと思うのですが，教材例集が出ていくときに，この文言も一緒に出ていくわけですね。

○西原主査

そうです。

○金田委員

早急に再度，確認作業をしなければならないと思います。

○西原主査

分かりました。そもそも最初に標準的なカリキュラム案で取り上げている生活上の行為の能力記述というのは，主査，副主査で中心となって作業をしたと思います。そういう経緯がございますので，主査である私がもう一度確認していくということが必要かと思いません。

○金田委員

実は配布資料2「教材例集について（案）」の256ページなどには，新しい生活上の行為の事例の下位項目や生活上の行為の事例の上位項目も加わっています。これには元から番号が付いていません。私自身はこの番号は最終的に翻訳版を作ったりするときにとっても役立つものだと思いますので，その番号もどうするのかというようなことも併せて御検討いただければと思います。

○西原主査

番号は，いろいろな面で相互参照するときのために残しておいた方がいいと思います。特にホームページ上でリンクが張られたりするときと同じ番号が生きていると，相互参照が楽になります。

○金田委員

ですので、新しく番号を振らなくてはならない部分があります。

○西原主査

例えば、配布資料2「教材例集について（案）」の256ページの「治療を継続する」というところに新しい番号が要するということですね。

○金田委員

はい。そういうことです。

○西原主査

新しい番号についてはどうすればよいでしょうか。

○山下日本語教育専門職

本日、お配りしている資料について、配布資料2「教材例集について（案）」と配布資料5「能力記述について」とで若干、異なる部分があります。配布資料5「能力記述について」では新たに「治療を継続する」で挙げられているものを既にある下位項目に割り振る形で処理をしています。そういう形で作業を行うと、新しく番号を付けずに作業ができますので、その方向で少し作業をしてはいかがかと思っています。

○西原主査

そうですね。最悪の場合、生活上の行為の事例に付けている番号が8桁になってしまったり、「-A」とか「-B」が最後に付いてしまう可能性があるのでしょうか。

○杉戸副主査

標準的なカリキュラム案を作成した際、そういったときのために7桁の一番下の1桁をゼロにしています。そこを枝番代わりに使えるようにしたんですね。

○西原主査

はい。分かりました。それでいいですね。

○杉戸副主査

7桁の数字を打っている部分についてはそのようにしていますが、4桁の数字を打っている部分については、そのように新しい事例に対応できるようにしていません。

○西原主査

「治療を継続する」は4桁に該当しますが…。

○杉戸副主査

ただし、それは先ほどの事務局の説明で、細かいレベルに分散させるので新しい番号は必要とならないという御説明でした。

○西原主査

はい。分かりました。ありがとうございます。金田委員、それでよろしいでしょうか。

○金田委員

はい。

○西原主査

その他、この教材例集について御指摘のことがございますでしょうか。いろいろな御要望を入れると、ユーザー側としてはたくさん読まなければならないのですが、よろし

いでしょうか。お気付きのことがあれば、締切が迫ってきておりますが、いつの段階でも御連絡いただいで結構でございます。

先ほど、能力記述の部分についてバージョンを示すという御意見がありましたけれども、一度、冊子体になってしまったものについては、目をつぶっていただかないといけないのですが、ホームページ上では来年でも再来年でも気付いたところでよくしていくということが可能だと思いますので、どうぞ御意見は引き続きお寄せいただきますようお願いいたします。

では、これからは能力記述について御議論いただきたいと存じます。この後、議論の機会も少なくなってきたので、大きなテーマから議論したいと思います。

その前に「ポートフォリオ」という名称について、前々回の日本語教育小委員会の際に、井上委員から「ポートフォリオという言葉はいろいろな使い方をされている」という御意見がありました。それから、先回の日本語教育小委員会では佐藤委員から教員養成課程においてポートフォリオを義務付けたという情報提供がありました。そのことについて、まず、佐藤委員にお伺いします。教員養成課程において「ポートフォリオ」という名前を教員養成でも使うのでしょうか。それとも違う名前と同じこのような成長の記録みたいなものを作るのでしょうか。

○佐藤委員

正式な名前は忘れてしまいましたが、ポートフォリオではありません。

○西原主査

漢字語でしょうか。

○佐藤委員

詳細を忘れてしまいましたが、義務付けられており、来年4月に新1年生になる学生から始まります。

○西原主査

「ポートフォリオ」という名前ではないということは確かだということですね。

○佐藤委員

通称ポートフォリオと呼んでいますけれども、正式には少し違う呼び名です。

○西原主査

井上委員，配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」で示しているようなものを「ポートフォリオ」と呼ぶことについて御意見はありますか。

○井上委員

「ポートフォリオ」という用語はいろいろなところでいろいろな形で使われるのですが、恐らく、かなり意識すれば、「努力の成果」とか、「努力の結果」とか、そういうことだと思います。芸術家であれば、それが作品なりますし、作品群のことをポートフォリオとよく言います。一覧性がある、その方の若いときから最後まで作品群をまとめたリストをポートフォリオとよく言うので、それと似たような使い方をするのであれば、「○○の成果」ということになると思います。日本語言葉、漢語でも何でもいいのですが、日本語にしておいた方がいいかなという感じを持っています。

○西原主査

委員の皆様方、いかがでしょうか。「ポートフォリオ」と言われると、何か分からないけれども夢があるなという気もします。

○井上委員

写真の世界では、大きな箱に和紙を入れ、そこに1枚ずつ、大きく焼いた写真、プリント

した写真を入れておくのですが、その箱自体をポートフォリオと言うんです。

○西原主査

箱自体ですね。

○井上委員

それで箱の中に作品が入っていて、それで成立するわけです。

○西原主査

ある映画で、デザイナーが自分の作品を抱えて就職活動をするのですが、それをポートフォリオと呼んでいたことを思い出しました。

○井上委員

それがまさにポートフォリオです。デザイナーの作品群ですね。手で描いたもの、それを全部、オリジナルを残しておいて、それを箱にきれいに詰めてあるもの、あるいはフェイル化されたものがポートフォリオです。私はそれが一番よく使われる使い方だと理解していたのですが、こういう教育の世界でも使われるのだなということを思いました。

○西原主査

「努力の記録」というのは何か夢がないような気がするのですが、いかがでしょうか。

○西澤委員

ヨーロッパではCEFR（Common European Framework of Reference for Languages：ヨーロッパ言語共通参照枠）以降、「ポートフォリオ」という用語についてそういう使い方をしているということです。

少なくとも独立行政法人国際交流基金の浦和のセンターの研修や、実際にJFスタンダードの試行をやってもらったところでは、実際に学習者にもポートフォリオを作ってもらって持たせているということをやっています。

○西原主査

そうですね。CEFRでは「ポートフォリオ」という言葉を使っていますね。

○西澤委員

そういう意味で言えば、世界共通語として今後流行させていくということを考えるかどうか、定着させていくことを考えるかどうかということなのだろうと思います。余りいろいろ意識してみても、違和感が出ると、結局、それは使われません。特に「学習の成果」と言われると何か学校の成績表のような感じがします。

○西原主査

先ほど、佐藤委員が俗称ポートフォリオとおっしゃった、俗称のほうがまかり通るということでしょうか。

○佐藤委員

それも含めてですが、大学の成績も含めて全体に対して他の名称があります。その中の学習者の学生の学びの歩み、履歴をポートフォリオと呼んでいるので、つまり、それを含めて全体については別の名前があります。ですから、学校などでは「学習の歩み」とか、「成長の記録」とか、「学習履歴」という名称でこのポートフォリオを呼んでいるようなことが多いです。ですから、「努力の〇〇」ではなくて「成長の記録」とかになるのではないのでしょうか。

○西原主査

では、それについてはまだ御議論があるということでしょうか。最終原稿でどうするかという問題が残りますが…。

○井上委員

学校教育で教員養成の現場でどう呼ぶのかということ、確認した方がいいと思います。

○佐藤委員

ただ、文部科学省そのものではなく、大学によって恐らく、呼び名が違っていると思います。各大学によって呼び名が違っていると思いますが、その中の一つとしてポートフォリオ、学習の履歴というものを盛り込むのだということになっています。

○西原主査

金田委員は授業の中で使っていらっしゃるとおっしゃいましたけれども、「ポートフォリオ」と呼んで学生たちと一緒に付けているということですか。

○金田委員

そうです。適当な日本語があればよかったですけど…。

○西原主査

ないから「ポートフォリオ」としたということですね。

○金田委員

相手は20歳前後の学生なので、新しいことをやるというイメージ作りも兼ねて、そのまま使っていました。

○西原主査

私の夢論と同じですね。何か分からないけれども、素敵なことだと思わせるということです。小山委員はいかがですか。「ポートフォリオ」という言葉についてはいかがでしょうか。

○小山委員

私も最初に聞いたとき、「ポートフォリオ」って、世間、ポートフォリオ、あちこちにあるわけですから「何だろうな」と思いました。実はつい先ほどまで、この議論が始まる前までは「分かりにくい。成長の記録とか、そんなものでいいのではないか」と思っていたのですが、ここ15分ぐらいの間に私も変わってきました。何にしても正確にきちんと反映した言葉を付けるということとはなかなか難しいと思うんですね。そうであれば、先ほど少しおっしゃいましたけれども、「今回、新しく変わったことをやるのだ」ということで、「ポートフォリオを作れと言うんだから作ろうか」ということもあっていいのかなと思いました。非常に感情的な意見なのかもしれませんが…。

○西原主査

分かりました。そのような御意見がいろいろあったということで承ります。実は名称も大切なんですけれども、学習動機を継続するための工夫をどうするかということについて、是非、本日は御意見を伺いたいと思います。頂いた御意見は、この後にまた日本語教育小委員会ワーキンググループで検討し、それを形にしていきます。動機の継続及び動機を高める工夫、または学習を始めるための動機付けということになると、道具的動機や外発的動機として大切なのは、井上委員が以前おっしゃったように、「これを持って行けば就職活動のときに得するよ」というような道具的動機付け、または外発的動機付けであればいいなということだと思います。ただ、それについては、世の中がこのポートフォリオのことを認識した後でそういったことが起ころうかと思うのですけれども、今の段階で何とか工夫を込めるとすれば、どんなことができますでしょうか。中野委員はいろいろ作っていらっしゃると思いますがいかがでしょうか。

○中野委員

今の御質問にズバリ答えるものではないのですが、少し気になっていることがあります。ポートフォリオで一番大事なものは、形成的評価の部分だと思います。配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の中に、総括的な評価はありますが、発展途上のものに対する部分はいかがでしょうか。評価を行った結果、もし課題が残っていたら、どうしたら課題が克服できるか、よりよくできるようになるかについてアドバイスすること、つまり、「あなたは今このレベルにいます」という判定よりも、「じゃあ、どうしたらよりもっと進めるか」というアドバイスすることがとても大事な部分だと思います。そこを指導者の方がやっていただけるような内容が入るといいなと思いました。

それから、「タスクはテストではない」という表現が何度か出てくるのですが、タスクも立派な評価だと思うんですね。つまり、テストという言葉に何か非常に反応している部分があるのですけれども、ここの趣旨というのは評価について「あなたは何点という意味では評価しない」ということで「テストではない」と何回も書いてあると思うのですが、学習をして目標を設定したからには、必ずそれが達成できたかを評価する必要があるとあって、それをタスクという形でやっているのは間違いないと思います。それは何となく「みんなで確認し合いましょね」というレベルではなく、やはり目標達成度を測る評価だと思います。

○西原主査

そうですね。しかも、タスクに対しては「できる」とか「もうちょっと」という段階を付ける形で評価はされるわけですね。

○中野委員

評価されます。ですから、「テストではない」と言ったときに、同時に「評価でもない」と思われるような表現は変える必要があると思います。

○西原主査

どう言ったらよいのでしょうか。例えば「この行為も、この行為も、この行為もできた。それをまとめて学んできたのかな」ということを自分も知る、指導者も知るためにタスクをやってみるわけですね。

そこを「テストではない」と言ってしまうと、「じゃあ、やらなくてもいいのか」ということにならないでしょうか。

○中野委員

今、この日本語教育小委員会で検討していることは、先生としても、学習者としても、最初に目標を設定して、それができたかどうか測るための活動を決めてしまうということです。つまり、総括評価を決めるということになっています。「こういうことができるようになったら、これはできたことにするからね」という学習者と指導者の一種の合意があります。その総括評価はタスク、ロールプレイでなくても、いろいろな方法が考えられるわけなんです。それはそれで決めておいて、なおかつ学習の過程においてもいくつか形成的評価を入れ込んでいくことが大事だと思います。

ですから、例えばここで言う生活上の行為、「隣人に容態を伝えて助言を求める」という目標を立てたら、それができたかどうかはこの活動で測るというものがあり、それが恐らく、ここではタスクと呼ばれていると思います。

○西原主査

しかも、それは配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の7ページのところからのこのリストの中に書かれています。例えば「初診受付で手続をする」というところの上に<RP>と書いてありますが、これはロールプレイをすることによって、このことができるかどうか測られるという印になっています。私の評価、先生の評価がそれにロールプレイという手段が加わるという表になっているということです。

○中野委員

今まで、いわゆるペーパーテストで何かを測ってきた部分を、むしろ活動で測ろうとしているわけですね。それは立派な評価です。ですので、配布資料7「能力評価に関する具体的な成果物について(たたき台)」で「テスト」と書かれているのは恐らく、紙のテストのことを言っているのだと思います。それはテストではないかもしれませんが、評価だと思います。

○西原主査

「テストではない」と言わない方がよいという御意見でしょうか。

○中野委員

はい。タスクは評価だと思いますので、余計なことは書かない方がよいと思います。その結果により、絶対的にその人のことを決め付けるといよりも、応援するための定性的なものが必要だと思います。総括的評価はやはり達成できたかどうかをきちんと評価するものだと思います。

○西原主査

そうしますと、今、中野委員がおっしゃったことは、恐らく、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について」の4ページ、5ページのところにもう少し書き加えるという話になりますでしょうか。3ページのところの全体的な表として、このスマイルマークで書かれているようなところの中に、「記録」、「振り返り」という両方向の矢印が付いているところに何か書き加えたらよろしいでしょうか。

○中野委員

はい。伊東委員はいかがでしょうか。

○西原主査

伊東委員は、日本語教育小委員会ワーキンググループの中で1ページにまとめた目安表のようなものを作るのかどうかということをおっしゃってくださっています。このポートフォリオ全体を自分がどのように活用するのか分かるように、一覧表みたいなものがあるとういのではないかということです。まだ、それはできていませんが…。

○中野委員

現場の先生方がどう考えるか分かりませんが、従来の評価はペーパーテストが多いのではないかと思います。詳しくは分からない部分がありますが、恐らくそうだろうと思います。ただ、今、検討している能力評価について申し上げますと、生活上の行為が目標ですから、その評価も行為、つまり、活動をもって評価しなければならないというところがすごく大事ですね。

そのタスクは従来のペーパーテストに匹敵するきちんとした評価であるということをやうまく表現する必要があると思います。「テストではない」と言うと、テストがほかにあって、仮に何か活動しているような印象を与えなければいいなと思いました。

○西原主査

分かりました。これは立派な評価であるけれども、ペーパーテストのような形でランク付けをするようなものではないということを書いた方がよろしいという話ですね。ありがとうございました。それはやはり動機付けにつながるのでしょうか。

○中野委員

そうですね。それから、最初から学習者はこの活動ができればこれがクリアできたというふうに考えていいのだという非常に透明な評価と言ったらいいのではないのでしょうか。

○伊東委員

配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について(たたき台)」についてで

すけれども、基本的には報告書の一部となり、将来的には学習者が使うというように考えていいですね。

○西原主査

報告書の一部となったところでホームページに載ります。この間開催された日本語教育小委員会ワーキンググループでも確認したと思うのですが、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」のフォーマット、つまり、表等はダウンロードできますし、例えば教室によっては、「これとこれを使いましょう、このフォームを使いましょう」といった形で、それぞれの独自性を持って使い始めるということもあります。この形で全て、紙媒体で出た形で使われる、それだけが紙媒体として使われるというものにはなり得ないです。大体、印刷部数が限られていますので、手にした者だけが使えるとなると、それは少し制限的過ぎます。

○伊東委員

私はこれが出るとしても、私は評価ツールと言ったときに「支援者へ」といった感じで簡単な説明があり、後は「学習者へ」という形で書くトーンを変えた方がいいかなと思いました。

どうしてかと言いますと、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の5ページですが、非常に説明的なところが多いと思うところもあれば、表現が「○○しましょう」となっている部分もあります。学習者がもしこれを使うということであれば、私はあまり説明は必要なくて、「学習目標を立てましょう」、「○○しましょう」、「勉強しましょう」、「日本語がどれだけ身に付いたかチャレンジしましょう」というような感じで、もう少しフレンドリーに書いてあればいいと思います。今、「タスクはテストではありません」などとありますが、学習者にこういう説明は必要なく、これは支援者だとか周辺の人たちが知っていればいいことだと思います。もう少しこの書くトーンを支援者、学習者、要するに日本人向けと学習者である外国人の人たちとで分けた方がいいかなと思いました。

そうすることによって、もう少しこのポートフォリオというものを身近に、なおかつ記録だと思ってもらえるのかなと思いました。特に7ページについては、私はもう少しハンディで使い勝手がいいのではないかと考えました。「私の評価」のところは、このボックスの中に星だとか、丸だとかチェックできるように既に書き込んであって、チェックするだけにしてもいいかなと思いました。要するに4段階とか、5段階評価で自分の該当するところを見るという感じです。

例えば「初診受付で手続をする」というのは、恐らく、これは彼らの母語で書かないと、当然、対応できないということもありますよね。日本語と外国語併記かもしれないですけども、このまま出るというわけではないと言うか、当然、翻訳併記ですね。

○西原主査

そうすると、まず伊東先生のおっしゃったことをこのフォーマットの中に実現しようとすると、日本語ポートフォリオについての説明の後に学習者の方へのメッセージというページを作り、そこでは「どういう段階で何を使って見てください」ということを書くことが必要ですね。

それから、自己評価のときに「うまくできた」「何とかできた」「できなかった」というもののほかに日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者の方々、検討のときに「一人でできた」「助けが必要だった」みたいなスケールも入っていましたよね。それはどうするのでしょうか。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（宇佐美氏）

配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」では今、「うまくできた」「何とかできた」「できなかった」という3段階にしかありませんが、ここが少し変わってきます。私が考えたのは4段階ぐらいにしている、その中に周りからの助けがあっただけのもの、できなかったものと区別できるようになっています。

○西原主査

「何とか」の中に、もしかしたら「一人でできた」「助けてもらってできた」ぐらいのところになるのでしょうか。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（宇佐美氏）

はい。そうです。

○西原主査

というようなことがあります。そうすると新しく学習者向けのページを作り、そのときはもう少しはっきり分かるように易しい日本語プラスはっきりしたメッセージで書くということですね。

○伊東委員

それで恐らく、支援者や協力者は最初の二、三ページを一度読んでしまえば、もう大体のことが把握できますよね。

どんどん学習者が来たときに、必要なページは何ページか、何ページに何が明記がしてあるのかということがぱっと分かるようにする、ダウンロードする際も、「あ、ここは学習者向けだから、どんどん学生が増えてもプリントアウトするところはここだ」ということがより明確に出ているとよいと思いました。今の資料ですと、どこまで誰のためにコピーしたらいいのか分からないという感じもします。

○西原主査

そうすると、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の7ページの「1.生活上の行為達成の記録」、これは「学習者用」と書いておくということですね。

○伊東委員

よく冊子の上の方に書いてあったりしますが、「学習者用」とか書いてあれば分かりやすいと思います。そうすると、「これは学習者用で、これは教師用で…」とか、いろいろと分かりますよね。どのページがどういう人向けかということが一目瞭然だとよいと思いました。

○西原主査

そういうレイアウト上の工夫もあるということですね。

○嶋田委員

動機付けにつながることなのですが、例えば配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の7ページですが、これを見ますと、今後どういうレイアウトになるにしろ、このときの2011年11月22日の評価が例として書かれているわけですね。

○西原主査

そうです。

○嶋田委員

私は学習者が動機を持ち続けるためには、「達成感を持たせる」ということが大事かなと思います。例を挙げますと、私どもが作った教科書は初級と初中級で同じテーマを扱っています。例えば、初級のときに自己紹介をした発話をICレコーダーで録っておいて、それを次の段階で聞いてもらい、初中級のときに「こんなに伸びたんだ」ということを実感してもらえるような構成にしています。同じようなテーマでより社会性が広がっていく、これが中級になるともっと一般化して広がっていきます。そういう意味で言うと、今回は

無理かもしれませんが、**「2011年のときにはこれはできなかった」とか、「何とかできたけど、人の助けが必要だった」**けど、「もう1回やったら次はできた」というようなことが記録できるようにすると良いのではないかと思います。評価を縦軸と言うか、何回か記録できるようなものにすれば、もう一度見るだろうと思います。3か月経ってからもう1回自己紹介をして、過去の自分の自己紹介を自分で見たときに、「私ってこんなに話せるようになったんだ」ということをみんな叫ぶんですね。ですから、やっぱりそういう縦軸での評価というのがあるといいかなと思いました。

○西原主査

これはどうすればよろしいでしょうか。

○嶋田委員

先ほどから考えていたのですが、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の7ページ、「(1) 年月日」と「(2) 場所」を一緒にして小さくして、いつどこでやったか記載するようにします。そして、1回目と2回目について書き込めるような欄を作っておけばいいのではないのでしょうか。1回やってみて、できなかったものはもう1回やればいわけですから…。

○西原主査

「(1) 年月日」, 「(2) 場所」の辺りで複数併記ができるような工夫をするということですね。

○嶋田委員

少しずらして、そのような記入ができるようにすればよいのではないかと思います。

○西原主査

そうですね。

○嶋田委員

学習者にとっても自分の伸びが見えたりするのはいいことだと思います。結局、文型の積み上げが良くないところは、それが終わったら次の文型に行くということですね。せっかくこのタスクがありますので、もう1回やってみるといいかでしょうか。

○西原主査

ですから、自分でダウンロードしたものをコンピュータ内に持っている人にとっては、それは簡単なことです。一つ、欄を作ればいわけなのです。「0101060」という数字は生きていくので、その段階、同じところに「何年何月、チェックマークから丸になった」とか、「助けが要る」から「助けが要らない」になったというようなことがあればいいわけですが、コンピュータ上ではそれは簡単に操作できることですね。

○嶋田委員

ええ。それから、もう一つはウォッシュバック効果と言うか、教育的効果です。ポートフォリオの記入欄が二つあることで指導者も縦軸で見ていくのだということが分かるのかなと思います。使わなければ使わなくてもいいと思いますし、三つ必要だったら、それこそセルを作っていけばいいと思います。何かそういうのも、やってすぐにできないわけなので、そういう見方をしてもらえるようにという意味で欄を複数作ってもいいのかなと思いました。

○西原主査

生活上の記録を積み重ねていくからこそポートフォリオなんですけれども、そのときにできなかったことができるようになったと自分にも他人にも分かる工夫というのをペーパー上で展開するというのは難しいですね。

○伊東委員

今の嶋田委員の話ですが、時系列的に書き込めるようにしておけばいいということですよ。

○嶋田委員

時系列まで行く必要はありません。二つぐらいでいいと思います。三つある場合でもそれはどうでもよくて、せめて少し変化が見えるようなものにできたらいいかなと思いました。

○伊東委員

そうですね。今の配布資料7「能力評価に関する具体的な成果物について（たたき台）」だと1回限りというイメージになってしまいますね。

○嶋田委員

はい。1回限りでそれで終わってしまいがちなかなと思います。

○尾崎委員

今見ている配布資料「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の7ページには標準的なカリキュラム案全体がカバーする項目が並んでいます。でも、実際に勉強する人というのは時系列で勉強をしていきますから、恐らく、教室を始めるときに、「じゃあ、今学期はこれとこれをやろうね」といった話があり、1日ごとに「これをやった、これをやった、その日はどうだった」と書いていくのだと思っていました。ですから、今、嶋田委員がおっしゃっているような、例えば7ページの一番上の「隣人に容態を伝えて助言を求める」が2行に分かれていて、「1回目」、「2回目」とあり、そこに日にちを入れるとおっしゃっていますよね。

○嶋田委員

いや、もしやる場合は欄を作ってやればいいのかないかなと思いました。

○尾崎委員

はい。私のイメージは全然違っていましたので…。

○嶋田委員

ですから、同じようにダウンロードして、1枚あるものに対してという意味です。この中でもやはり使うものと使わないものがあります。その人によってダウンロードするわけです。だからこそ、これがもっとできるようになったらと少し思ったんですけども、その都度ではありません。

○尾崎委員

極端な場合、「今日やってうまくいかなかったから、また来週やろうね」という感じにして、何回かやって、「まあ、このくらいでいいにしようね」とか、いろいろなことが起きるから、恐らく、時系列で記録を取っていき、ポートフォリオだから、そのとき使ったシートとか、ハンドアウトとかも、どういう形で保管するかは別にして、それをきちっとファイリングして持つようにねというものだと思っていました。そういうことでよかったのでしょうか。

○西原主査

そうです。

○尾崎委員

分かりました。

○西原主査

ポートフォリオというのはファイルのことですから、紙媒体であっても1ページ目と5ページ目は違う日のことと言うか、紙が5枚あったとすれば、1枚目と5枚目は違う日のことになります。だからこそファイルなんですよね。

○尾崎委員

そうすると、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について」の7ページから9ページに出ているこのリストは何を説明しているリストなんですか。

○西原主査

それ自体は生活上の行為達成の記録ですから、ある時期、これが丸だったものが次のページに行ってみたら二重丸や花丸になっていましたということです。そういう現れ方をするわけですが、それを例えばコンピュータ上であれば、「0101060」とやっていく並びますよね。そうすると、成長の記録というのはすぐ分かるということになるだろうと思います。それをペーパー上で記録するためには、何らかこれが伸縮自在みたいな工夫ができないかというのが嶋田先生の御意見です。

○嶋田委員

もちろん、パソコン上ではできるのですが、なかなか活用しない場合もあるのかなと思いました。

○西原主査

基本的には学校の先生と言うか、支援教室に行っている場合には、その学校がやってくれればいいわけですよね。

○岩見委員

恐らく、現場の使用するイメージとしては、毎回の活動は達成の記録に書くのではなくて、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の19ページからの「今日学習したこと」にあるように「毎回、毎回教室でどういうことをしたか」というところを書くわけで—そこのコメントにできた、できないとか入ってもいいんでしょうけれども—恐らく、この生活上の行為の達成の記録、7ページの部分はコースの初めと最後、あるいは長ければ中間とか、そういう間隔を置いてこの達成はできたかどうか、そしてその成長の記録がそこで分かるという使い方をするのだと思います。

○西原主査

ある程度のまとまりを持ったタスクですよね。

○岩見委員

ええ。恐らく、そういう使い方になるのかなと思います。

○佐藤委員

今、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」で例として示されているものでは、私の評価と先生の評価はずれているという理屈だと思います。

○西原主査

いや、これはもちろん、ずれなくてもいいんですけども…。

○佐藤委員

例えばこれは先ほどの伊東委員の意見ともつながっていくのですが、動機付けという観点から言うと、「自分はやっているのに、どうして先生が「×」を付けるのか」ということがあります。つまり、これは能力評価のツールだからいいのだらうと思いますけれども、

指導の記録と学習者の学習の記録というのが混在しているような気がします。ですから、動機付けの観点から言えばこれは非常にまずい話であると思います。

つまり、これは「何で私はこれだけやっているのに先生は「×」を付けるのか」ということです。ですから、この辺りのところをどのように扱うかということがあります。この能力評価ツールでは、あれば指導の記録と学習の記録が両方混在しているんですね。先ほどの教員養成の話も全く同じであって、ここで言う2番目、学習の記録はいわゆるポートフォリオで、もう一つの方は指導の記録に関わってきます。ですから、そこを全体でこれを一つにしていくのだろうと思います。

○西原主査

ただ、「できた」、「できた」、「できた」だけを積み重ねていったのでは成長の記録とは言えないですね。

○佐藤委員

ですから、これを例えば先ほど言ったように、ある最初の段階で学習者が「できた」と思ったものを先生が「だめだ」と言うのでは動機付けにならないわけです。それをどうするのでしょうか。

○西原主査

いかがでしょうか。ですから、この部分については「もう1回やろう」というメッセージになるわけですね。もしこれがロールプレイの結果、先生は「×」を付けたけれども、私は「何とかできた」にチェックを付けたら、日本語教室的にはもう1回やってみようねということになるわけですね。

○佐藤委員

ですから、例えば「もう1回やってみようね」と言うとき、具体的にどこをどう改善していけばいいのかというところがポイントですね。

○西原主査

そうです。そこが話し合わなければならないわけです。

○佐藤委員

その辺りのところ、つまり、指導の記録と学習の記録ということが一体化していればいいのですが、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」だけが出てくるとどうなのかということになるのではないのでしょうか。それで、先ほど、伊東委員がおっしゃったことにつながっていきます。学習者用と指導者用をうまく区分けして出せばいいのかなという感じがしました。

○金田委員

今、佐藤先生がおっしゃったことは、要は自己評価と先生の評価がずれることについてだと思うのですが、それは大前提だと思います。やはりポートフォリオの評価のときに重視したいのは、ずれたことに関して「あなたは何でできたと思ったのか」ということ - これは逆もあると思うのですが - このことについて指導者と学習者が意見交換をしていくことが大事なのだと思います。それによって足りない部分はこういうところだったということを知ることが分かってもらうことができます。学習者とそういった議論ができるかどうかは分からないのですが、学習者と指導者の見ている部分が違うのであれば、それを明らかにしていくということがポイントとしてあったと思います。

それから自己評価について、この「✓」が「できなかった」になっているのですが、原案を作ったときの私の書き方に問題があったかなと思うのですが、「できなかった」ということを記録するのかどうか疑問に思っています。「何とか助けを借りてできた」ということと「目標ができました」ということと「非常によくできた」という3段階は分かるのですが、「できなかった」というのをわざわざ記録に付けるというのは、どうなのかと思いまし

た。既に先生に書いてもらう方は、「もう一息」と書いてあるんですけども、「もう一息」は、私個人としては「もう少し何かできればよかったけれども、まあ、大丈夫かな」という状態を「もう一息」という言葉で表現していました。それから、実は同じ「✓」でも指導者側のチェックと自己評価のチェックは既に意味合いが違うのかもしれないということがありました。ですので、ここについては、もう1回検討が必要かなと思います。

○西原主査

一つには、金田委員が言うように「うまくできた」、「何とかできた」、「できなかった」というスケールを同じ3段階でも言い方を変えることによって、今課題として出てきたことは救われるだろうということとですね。それから、その後に絶対にこれは次なる学習に対しての話し合いが必要だということをこの段階にも、もう1回繰り返して書いておくということですね。

○金田委員

そうですね。そのことについて全然触れていないので、自己評価は客観的ではなく、先生の評価が客観だという話になっていけないと思います。ですので、先ほど、議論に出てきたようなずれが起こるということは一体どういうことか、それに関してどうするのが必要なのかということがどこかに書かれている必要があると思います。

○西原主査

そうですね。佐藤委員にお訊ねしますが、公教育において、絶対評価では、どういう用語を使うのでしょうか。「できる」、「頑張ろう」でしょうか。

○佐藤委員

学校によって異なると思います。

○西原主査

学校によっても違うのですか。

○佐藤委員

ええ、通信簿はそうです。ですから、「できる」「もう少し」とかいろいろになります。

○西原主査

「できなかった」とはならないですね。

○佐藤委員

「できなかった」というのは「頑張ろう」ということになります。

○西原主査

「できなかった」というのはないのですね。「頑張ろう」になります。だから、その言い方の工夫をすれば、「もう少しやろう」や「もう1回やろう」というような形になることはできますね。

○岩見委員

少し使い方が把握できなくなったのですが、生活上の行為達成の記録、これはこの学習した後の記録だけに使うのか、全然学習していない方が自分の能力をチェックするためにも使うためのものなのか、いかがでしょうか。

○西原主査

使い方はいろいろになります。

○岩見委員

いろいろ使えると思います。

○西原主査

ただ、日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者の中ではどうでしょうか。

○岩見委員

そうであれば、「できなかった」ということもあり得るのではないのでしょうか。

○西原主査

それはそうです。

○岩見委員

ここができないから、次にここを学びたいというときにも使うということですね。

○西原主査

それもあると思います。一応、一番使われやすい使われ方としてはどういうことを考えていたのでしょうか。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（神吉氏）

そういう使い方もあるだろうということになっていたと思います。

○西原主査

ですから、初めと言うよりは、むしろ「少しやってみた。これもこれもやってみたけれども、どうなったかな」という確認のために使うということが一番あり得る使われ方として想定されていました。だからこそ、この先生と学習者の評価がずれているものがわざわざサンプルとして出ているということです。

○嶋田委員

私は13ページからの「2-1 教室活動の記録」がいわゆるポートフォリオで、その日、そのときの記録の、保存し残していくものであると考えていました。

それで先ほど、尾崎委員がおっしゃった部分が配布資料7「能力評価に関する具体的な成果物について（たたき台）」の13ページだと思います。達成した記録は、ある期間を取って実施していくので、縦軸で見ることができたら良いのではないかと思いました。それと、どうやって動機の維持につなげていくかという意味では、学習者にも見えた方がいいかなと思いました。そうすると、やはり先生の評価というのは、先ほど金田委員がおっしゃったように、それぞれの教室の中で終わったときにやっていくことになるのかと思います。

○中野委員

5ページの説明の一番上の部分についてです。行為達成の記録の説明で、どんなことを目標にしてやったのか、その結果どんなことができるようになったのかを記録すると書いてあります。このまま読み取ると、達成できたことだけをこの行為達成の記録に書く、つまり、いつそれができるようになったかというほうが大事であり、いわゆる「×」が付かない記録と読めてしまいます。つまり、この時点でできるようになったけれども、そのレベルは「すごくよくできた」、「何とかできた」、「人の助けを借りてできた」というのはあるけれども、できなかったことについてはなじまないのではないかと思いました。タイトルが達成の記録ですから。恐らく、学習の記録の方で学習プロセスを追っていて、それで恐らく、この達成の記録はどこかで何か見せるときに使うものにした方がよいのではないかと思いました。

○西原主査

これを達成と訳してしまうから誤解が生じるということもありますね。日本語教育小委

員会ワーキンググループ協力者の宇佐美氏はいつも「アチーブメントではないのだ、プロチーブメントなんだ」と繰り返し、繰り返しおっしゃっているのですが、「プロチーブメント」はどう訳しているのでしょうか。

- 日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（宇佐美氏）
「プロチーブメント」について訳はないので、そのまま使っているかと思います。
- 西原主査
「達成」と言うと、「アチーブメント」ですよ。
- 日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（宇佐美氏）
そうですね。
- 西原主査
そのことを「達成」と言わずに表現するにはどうすればよいのでしょうか。私はプロチーブメントなので「お試しでしょう」ということで、「ちょっとやってみた」というような言い方をしているのですが…。
- 中野委員
よく分かりませんが、就職などの場で見せる可能性があるわけですよ。
- 西原主査
何を見せるかというのは、持って行く方と要求する方でいろいろ違ってくると思います。ただ、これはとにかく少しは日本語の勉強をしたところで実施するのが一番あり得る形ですよ。
- 中野委員
そうですね。なるべくできたことが一覧表になっていた方がいいですよ。その応援をしたりできます。
- 西原主査
そうするとやはり「達成」と呼び続けた方がいいのでしょうか。
- 中野委員
何か「学習の記録」と棲み分けができていいかなと少し思います。
- 西原主査
今のようなことを事務局の方で受け止めて作業をしてください。いろいろな御意見を頂戴いたしました。
- 中野委員
もう一つだけ、タイトルについてです。配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の「3. 記録のページ」というタイトルが他と少し異なります。「達成の記録」、「学習の記録」と来ていて、そこで「記録のページ」とすると、全部記録をするものなので、うまくいかないのではないのでしょうか。例えば、仕事と生活の記録とか—今、いいタイトルが思い浮かばないのですが—「3. 記録のページ」ではない方がいいかなと思います。
- 西原主査
最初はコレクションポートフォリオとショーケースポートフォリオという区別がありましたが、その区別は付けないことにしました。それをポートフォリオとしてまとめているのが今の状況ですが、「3.」の部分について記録のページのほかに何かいいネーミングが

ありますでしょうか。

○中野委員

内容としては仕事と生活の記録ですよね。

○西原主査

仕事と生活上の行為ですね。教室の記録と学習の記録は、これは日々のいわゆるダイアリーと言っているものと同じです。記録のページに代わる何かいいネーミングがありますでしょうか。「進歩のページ」…それでは、「学習の進歩」ではないのかと言われそうですね。学校では「〇〇の歩み」とか言うのでしょうか。歩みというのはだめでしょうか。

○伊東委員

あれですか、「1.」が「〇〇の記録」,「2.」も「〇〇の記録」とあり、「3.」をどうするかと言われると、「記録」で終えた方がいいですね。

○西原主査

全体として記録ですから、それはそうですね。

○金田委員

今、実際に入っている例でいくと、「住まいの記録」と「仕事の記録」と「生活上の行為の記録」になっているのですが、実はこの三つ目の生活上の行為の記録というのは、生活上の行為だけにこだわる必要もありません。もっと幅広く、日本語を用いて社会の中でいろいろなことをしたということを書いていくということですよ。

○西原主査

そうです。「自治会に入った」といったことも入ります。でも、それは大きく生活上の行為の範疇に入ります。

○金田委員

でも、例えばですが、小学校に行って文化を紹介したとか、教室を開いたといったように生活上の行為とは違うけれども、日本社会のどこかで日本語を使ってやり取りをしたということが書かれていけばいい、そういうものも入れていいわけですよ。

○西原主査

そうですね。それは大きく言えば、コミュニティに入ったとか、コミュニティで活躍したというようなことも入ります。

○金田委員

生活上の行為に入りますね。

○西原主査

生活上の行為に入れようと思えば入れられるという話ですね。

○金田委員

先ほど伊東委員がおっしゃったように、私も「〇〇の記録」とした方が統一感が取れていいと思います。いい言葉が浮かばないのですが「社会生活の記録」といったことではいかがでしょうか。そんな選択肢もあるのではないかと思います。

○西原主査

はい。分かりました。ありがとうございます。井上委員はいかがでしょう。

○井上委員

これは私も自分自身で持っておいた方がいいなと思うぐらいです。外国人の方の中には、まだ日本語が分からない段階にあって、日本語で記録ができない状態というのがあると思います。もちろん、母語だけ書いてもいいのかもしれませんが、それがそのうちに日本語で書けるようになった、日本語で確認できるようになったというのも一つの、ある意味、進歩なんですよ。

ですから、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の中でも、特にこの「3.3 生活上の行為の記録」のところについて、私も先ほどからこの部分を見ていたんですが、「3.3 生活上の行為の記録」が最後にあるのはどうなのだろうかと思いました。むしろ前の方に持ってきてもいいのではないかと思いました。日本に来て、「いつどこに住み始めたか」とか、「仕事の記録」というのは、まさにその人の人生そのものなのかもしれないですが、この「3.3 生活上の行為の記録」というのは恐らく日本語学習の記録に直結するものなので、「3.1 生活の記録」や「3.2 仕事の記録」の前に持ってきてもいいのではないかと思いました。

○西原主査

「3.1」の表現を「生活上の行為の記録」にするということでしょうか。

○井上委員

はい。その方がよいのではないかと思います。要するに、その前のところでは、学習したことについて書いてあるわけですよ。そのすぐ後にそれと合わせて、「あの頃、こういう勉強をした直後にこんなことをしました、例えば口座を作った」とか書いてあるとうよいのではないかと思いました。それが日本語で書けていたということになれば、そこで大分日本語ができるようになったということも確認できると思います。

○西原主査

分かりました。委員からいいネーミングが出てくることを期待しつつ、「3.」のネーミングを「社会生活のページ」にした場合、「3.1」が「生活上の行為の記録」から始まるのは自然なことでしょうか。どこに住んでいたかとか、どんな仕事をしたかということはその後でよいでしょうか。

○井上委員

「3.1 生活の記録」は最後でもいいぐらいです。

○西原主査

最後に来るとということでしょうか。

○井上委員

ええ、極端なことを言えば。そんなに転々とするということはないとは思いますが。もちろん、人によって結構、動くこともありますけれども…。

○西原主査

好きで転々とする人もいるでしょうし、好きじゃなくて転々とする人もいないではないと思いますけれども、いかがでしょうか。

○佐藤委員

エンドユーザーの立場からの意見ですが、「生活上の行為の記録」や「生活上の行為達成の記録」というのは、もっと簡単な表現にはできないのでしょうか。「生活上の行為達成の記録」というのは、とても難しいと思います。例えば、これは基本的に自分ができるようになったこととか、成長の歩みとかということでしょう。もっと分かりやすい表現にしたらどうかと思います。「学習の記録」だとか「学習の歩み」だとか、「自分の歩み」だとか、「生活の歩み」とか、何でもいいのですが、何かもう少し分かりやすい表現にした方がいいのではないかと思います。

○西原主査

これは日本語コミュニケーションの記録ですよ。

○佐藤委員

恐らく、日本語学習者が「生活上の行為達成の記録」と言われても分かりにくいのではないかと思います。

○西原主査

日本語を使って「〇〇ができるようになる」というのが大目標ですよ。そうすると、これは日本語を使った記録でいいんですよ。

○佐藤委員

はい。それでもいいと思いますが、非常に分かりやすい表現の方がよいと思います。

○西原主査

日本語を「使った」だけではなくて、使って何かしたということになります。

○佐藤委員

行為達成という言葉はそうなります。

○井上委員

それでも、飽くまでも学習をする場所での自分の評価と先生の評価が書かれていくわけですから、やはり最初の部分は教室での記録なんですよ。

○西原主査

そうです。もちろん、記録をする人が指導者でないこともあるとは思いますが、誰かが第三者的に見てもらっているというのが条件になります。「2.」は教室そのものの記録になります。

○井上委員

「2.」は教室が限定されるということですね。

○西原主査

「3.」は教室ではない生活上の記録の中にコミュニケーションに関するものも入れておきましょうという提案になっています。

○井上委員

例えば非常にしっかりとした企業であれば、日系人に対して様々なレクチャーをしたり、日本語学習の機会を与えたりするのですが、その記述は「3. 1 仕事の記録」、「3. 2 生活の記録」、「3. 3 生活上の行為の記録」にどういう形で振り分けられていくのかというところに関心があります。

○西原主査

企業内の日本語学習ということであれば、企業内であっても学習の記録は付けてほしいと思います。それから、第三者と一緒に生活する行為達成に関する記録も行ってほしいと思います。ただ、この記録のページに載せることは、それとは少し違うと思います。

○井上委員

配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の「3. 記録のページ」に記載することは、かなり自主的なものでしょうか。

○西原主査

自主的なものと言うか、学習者に頼まれて他の人が書くということはあるかもしれませんが、少なくとも支援者がいたり、第三者的な目があってチェックするというものではありません。自分でやったということを書くということです。例えば、学校に行って話をしたということも入ると思います。祭りで店を出したということも入ると思います。

○井上委員

正に生活上の記録ですね。住み始めたということも、「3. 3 生活上の行為の記録」と一緒に書いてしまってもおかしくないのでしょうか。

○西原主査

同じになるようなものではありませんが、この「3.3 生活上の行為の記録」はコミュニケーションの記録ですよ。コミュニケーション上の生活上の行為になります。教室とは関係なく、自分で何かやってみたことを記録する場所があったらいいのではないかということが日本語教育小委員会ワーキンググループでの話です。

○井上委員

この部分は絶対に必要だと思いますが、本当に極端な話、日本語が分からないままで来日した日系人が「最初にこれを記入しなさい」と言われて、「日本語ではなくて例えばポルトガル語とか、スペイン語でもいいですよ」ということになった場合に、「3. 3 生活上の行為の記録」の部分が最初に来た方が本当はいいかもしれないです。「○月○日に日本に来ました。友人の紹介でアパートに入りました。アパートの契約はこういう形でしました。そのときに「おはよう」、「こんにちは」という言葉を覚えました」ということを自分で書くのが最初にあると思います。

○西原主査

実はそうでした。日本語学習ポートフォリオが「コレクション・ポートフォリオ」と「ショーケース・ポートフォリオ」に分かれていたときは、コレクション・ポートフォリオの第1番目にいつからいつまでどこに住んだか書く部分が入っていましたが、一つにまとめる段階で、むしろ生活上の行為達成という目標とつながる言語の学習の記録を先にする形でまとめていきましょうという合意ができ、その結果、生活上の行為の記録が後ろにいったという経緯があります。

○井上委員

「3. 3 生活上の行為の記録」は最後までいいのですが、「3. 1 仕事の記録」や「3. 2 生活の記録」も一つの範疇に入るものではないかなと思いました。居住と職業と様々なコミュニケーションを伴う行為について何かうまくまとめられないのでしょうか。

○西原主査

分かりました。もし「3. 記録のページ」を社会生活のページと言うのであれば、生活の記録、そして仕事の記録ということにもなりますね。

○井上委員

それで、よいのではないのでしょうか。

○西原主査

その「3.3 生活上の行為の記録」は、もしかしたら「3. 2 生活の記録」や「3. 1 仕事の記録」に入っていくのでしょうか。

○井上委員

そういう可能性があると思います。

○西原主査

そういう可能性があるということですね。

○井上委員

はい。恐らく「3. 2 生活の記録」の最後にそういうページを付けて、自由記載できるようにすればよいのではないのでしょうか。

○井上委員

それは日本語教室ではないですけれども、いろいろなことをやりました、例えば「銀行の人のサポートを受けて口座を開きました」といたことを書くということです。

○西原主査

「生活上の行為の記録」を記載する部分が、「3. 記録のページ」の中に入っているのはどういう理由があったのでしょうか。

○山下日本語教育専門職

教室活動ではないということで最後の部分にきています。

○西原主査

教室活動ではないということで「3. 記録のページ」、つまり生活の中に入れたということでしたよね。

○井上委員

そうであれば、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の前の方はあくまでも教室での話ですよ。

○西原主査

基本的には教室です。ただ、使われ方によっては、先ほど岩見委員がおっしゃったように、ある外国人が自治体の交流協会にやって来て、「日本語を勉強したい」と言った場合に、どの程度できる人なのかということをチェックするために配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の「1. 生活上の行為達成の記録」が使われる可能性はあるということです。「ちょっとやってみて。あなた、こういうふうに言ったらどうするの」というようなことを母語で話し掛けて、日本語で話せるのかどうかということを見るというのはできないことではないですよ。

○井上委員

結構、やっていると思います。職場の先輩が就業時間後に、30分付き合っ「一緒に町のスーパーに行って買い物をしよう」と言って30分付き合っいろいろ教えてくれたということはあると思うのですが、最初は全部母語でやるわけですよ。そういったことがどこに記録されるのかなと思いました。それは日本語学習ではないけれども、経験としては大事な経験ですよ。

○西原主査

例えば同国の先輩と一緒にスーパーに行き、お金を払うところだけ自分でやったということもそうです。

○井上委員

そうですね。お金を選んで、お札を選んだりして…。

○西原主査

お礼を選んで、お釣りをチェックしたということも、当然、生活上の行為ですよね。ですから、それらがみんな配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の「3.3 生活上の行為の記録」の部分に凝縮されていきます。ですから、もしかしたら「3.3 生活上の行為の記録」はも母語で書いてしまうことなのかもしれません。

○井上委員

そういうことをしっかりと記録する人というのは、恐らく、日本語が伸びるんだと思います。それがだんだん日本語で書けるようになっていくわけです。

○西原主査

そうです。自律することの第一歩です。ですから、順序について少し考えてくださいということですね。

○尾崎委員

配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の4ページの最初のところにポートフォリオを付ける意義の説明があるのですが、ほかの人に自分の学習履歴を見せるという使い方について議論が行われましたが、それが文言に入っていますでしょうか。

○西原主査

実は日本語学習ポートフォリオがどのように活用されるかということについて、皆さんで合意をしてから書かれることではありませんが、見せるということをはっきりと配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の中に書くべきでしょうか。

○尾崎委員

ポートフォリオを外国の人につけてほしいというときに、どういうことがプラスになるかと言うときに、「学習をサポートしやすいようにあなた自身が学習を振り返るためにいいですよ。」ということが書かれているとよいのではないかと思います。

○西原主査

それが第一だということですが、見せるということは、「ショーケース・ポートフォリオ」という名前が引込んだところで少し後退したと思います。つまり、どのように見せ、どのように社会がそれを活用するかというところまでは一ここは用心深くなっているところがあるのですが一尾崎委員の御意見では、それは動機付けにもつながるので、やはり書かれたほうがいだろうということでしょうか。

○尾崎委員

恐らく、どう利用するかというのは企業なり、日本人サイドの問題なのですが、ポートフォリオを付けることがどのような役に立つかという趣旨で書かれていていいことなのだと思います。

○西澤委員

配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の4ページの一番下の「※」のところに、周りに伝えたいことまで含めて、少しそのことが書いてあります。「書きましょう」という言い方で書いてあるのですが、伝えたいことをここへ書いておくということは、見せるということが前提ではないかと思います。

○杉戸副主査

さらに配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の5ページに「●」が六つ並んでいます。その二つ目、三つ目、四つ目は見せることについ

て書いてあります。4ページの総論のところには書いてありませんが、具体的にそれぞれ学習者に語りかけるような口調で書いてあります。また、見せる相手が3種類書いてあります。

○西原主査

そうですね。ただ、先ほど、いろいろな御意見の中で、支援者向けにポートフォリオの使い方を書くところと、学習者向けに分かりやすく書くところを分けた方がよいというお話がありました。今、杉戸副主査がおっしゃった学習者向けに語りかけているところは後ろにまとめて、もっとはっきりと書くということになりますでしょうか。

先ほど御指摘がありました。学習者に語り掛けて「○○をしましょう」と言っている部分と、それから、支援者向けに「○○してください」と言っている部分が配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の4ページ、5ページ、6ページの中に混在しています。尾崎委員の御意見は、総合的にどちらに対してもそのことは書かれるべきだという御意見ですね。

○尾崎委員

特に強い主張ではありません。

○西原主査

ええ。ですけれども、そういうものがあつた方がいだろうということですね。

○尾崎委員

特に外国人に対して、ポートフォリオを付けることの意義を分かってもらうという意味で、あつてもいいなと思ったというだけです。

○西原主査

動機付けにもなりますね。

○尾崎委員

そうなのですが、細かいところにそれが全部入り込んでいけば、読んだ人が理解できるでしょうから、それでよいと思います。

○西原主査

ただ、最初にもそのことは一言あつてもいいということですよ。つまり、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の4ページの一番下の行の「ほかに自分が記録したいことや」という「ほかに」というところは、これは生活上の行為達成の記録と言うか、社会生活の記録とか何か、そういう話なのですが、でも、周りに伝えたいことも記録するということが一番上に2段落ありますけれども、3段落目に書かれてもいいかなということでしょうか。

○尾崎委員

あつてもよいのではないかとこのところでは。

○西原主査

それから、先ほど御意見がありました。学習者向けのメッセージのページを6ページの辺りに作るというのはよろしいですか。その場合、どういったメッセージになるのでしょうか。

○金田委員

支援者が読むべき部分というのは、学習者の方々が持つものと少し切り離してあつてもよいのではないかと思います。どうしてそう思うかと言いますと、要は本体の部分に入る前にいろいろなものがあると読まれなくなってしまうのではないかと思うからです。教科

書もそうなのですが、「はじめに」の部分をしっかり読んでくれる人というのは非常に少ないです。「はじめに」の部分を読めるようにということで、何か国語かに訳してある親切な教科書もありますが、見開きぐらいにコンパクトにまとめてある場合でも、読まないです。すぐ中身に入りたいですね。その気持ちは私も学ぶときの態度としては分かります。ですので、なるべくその学習者の方々に伝えたいメッセージは簡潔に1ページ程度にまとめておくということと、それと同時に学習者は支援者向けのページは見ずに済むということにしたいのかなと思いました。

○西原主査

分かりました。今、実際には二つのことを同時に御検討いただいています。配布資料3「生活者としての外国人」に対する日本語教育の能力評価について（報告書の全体構成のたたき台）は報告書全体に関する資料です。成果物の構成というところでポートフォリオというのが入ってくるということになります。ポートフォリオというものの説明と、それから配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の説明のものというのは、内容的には重なってしましますが、少し異なります。

金田委員の御意見は、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」、つまり、評価ツールそのものの部分に長く説明を書くのは避けた方がいいのではないかという話ですね。

○金田委員

そうです。ですが、支援者向けの部分が報告書の中にしか入っていなかったりして、完全に別のものという感じになってもよくないのではないかと思います。例えばホームページに載せるときもポートフォリオをクリックするアイコンがあるとすれば、それは「学習者向け」というアイコンと「指導者向け」というアイコンがあり、指導者が「指導者向け」のアイコンを押して、ポートフォリオを見ようとする、最初のページ部分が見られるようになっている、その一方で学習者の方は「学習者向け」というアイコンを押すと指導者向けのページは飛ばして、いきなり「学習者の方へ」というページに飛ぶという構造にすればよいのかなと思います。

○西原主査

そうしますと、実際のポートフォリオそのものというのは7ページから始まるわけです。そこにトップにもう1ページ加えて、学習者の方へと書いてあれば、学習者はそこは読むでしょう。そこをはっきりと目立たせればよいのではないかと思います。

そういうことですので、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の1ページから6ページまでというのは、飽くまでも支援者または一般の方へのメッセージです。

○中野委員

今、4ページから6ページは学習者向けに書いているように思いました。

○西原主査

いや、混在しているので、ここから学習者向けの部分を抜き出さないといけないと思います。

○中野委員

2ページと3ページは支援者向けのスタンスで書いてありますが、4ページから6ページは全体として主語が「あなたが」となっていますので、学習者向けで統一されているのではないかと思います。

○西原主査

ただ、4ページはどちらとも取れると思います。5ページは明らかに学習者向けですが…。「あなたの」と言っている部分については、確かに学習者に向けて書いています。です

から、この中から学習者に向けて書いている部分はもう少しイラストを増やし、矢印などを入れ、フローチャートを付け、「必ずこの部分とこの部分とこの部分は書いてください」ということをメッセージとして伝える必要があります。ただし、それはこんなに長く書く必要はなく、もっと短くはっきりと書くということですね。

つまり、このポートフォリオは恐らく誰かが学習者に対して「こういうものもありますのでどうぞお付けください」と口頭で伝えることから始まります。それは教育機関又は地方自治体の窓口、あるいは誰か個人ということになるのですが、生活上の行為達成の記録の前にフェースシートのような形で学習者に対して「こうしてくださいね」というメッセージが書いてあるということです。ただ、ポートフォリオ全体の冊子としては、少なくとも説明部分が前に付いていないと格好悪いのではないのでしょうか。

ですから、指導者向けの部分において「あなたの」と書いてあるところは「彼らの」に書き換えられなければならないだろうと思います。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（神吉氏）

私の個人的な感想ですが、日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者の間で共通理解になっているわけではないのですが、学習者が知りたい情報というのは、恐らく、これをどう書けばいいかということになると思います。

それで、こちらが学習者に与えたい情報というのは、それプラスアルファということになりますので、記入例の部分にいろいろ盛り込めばよいのではないかと思います。そこに例えば私の評価と先生の評価がずれているような記入例を書き、「こういうのはこう使うんですよ」ということを書けばいいのかもしれないなと思いました。

○西原主査

そうですね。例えば「生活上の行為達成の記録」は支援者など誰かと一緒にやってくださいというメッセージを伝えないといけないですよ。自分だけで書くのではないということです。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（神吉氏）

はい。それから先ほど、生活上の行為の事例について複数回、チェックを受けた場合にどうするかという話がありましたが、例えば2回チェックしているものを記入例に書いておけば、「2回やってもいいんだ」ということになると思いました。

○西原主査

川端協力者はいかがでしょうか。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（川端氏）

やはり、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の4ページと5ページについて、学習者向けと指導者向けの部分をはっきりさせた方がよいのではないかと思います。

○西原主査

そうですね。確かに配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」ではメッセージが混在しています。宇佐美協力者はいかがでしょうか。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（宇佐美氏）

これまでに意見で出たようなことでよいと思います。

○西原主査

生活上の行為達成の評価マークについて「何とかできた」のところは「自分でできた」、「手伝ってもらってできた」ということにして、「できなかった」という評価は付けられないことでのよいのでしょうか。

○日本語教育小委員会ワーキンググループ協力者（宇佐美氏）

「できなかった」という評価は、私も最初からは考えていませんでした。

○西原主査

生活上の行為達成の記録なので、「できなかった」ということはありません。指導者に書いてもらう部分については、「十分に達成」、「目的達成」、「もう一息」でしょうか。「✓」はいかがでしょうか。文化によって意味が違います。私も外国から日本に戻ってきたときに、学生の答案に「✓」を付けたら、「先生、これ、間違いなんですね」と言われたことがあります。「✓」が「よろしい」という意味になる国もあります。

○金田委員

誤解が生まれる可能性があるのであれば、記号は変えた方がいいですね。

○小山委員

評価について、本人の評価の「何とかできた」という言葉が先生の部分では「目的達成」となっています。これは意味が違うのでしょうか。意味が違うというのは、その本人が何とかできたと思っていけば、それは目的達成という評価になるわけでしょうか。わざわざ言葉を変えてありますので…。

○西原主査

そろえてしまってもいいのではないかという話ですね。

○小山委員

ええ。意味が違うのかどうかということが気になりました。

○西原主査

教師用では難しい言葉になっていますね。

○小山委員

先生から見たときの「目的達成」と本人から見たときの「何とかできた」の意味が違うのかと思いました。それからこれは外国人が他の人に見せる目的で作るものではないのですが、外国人が「私は日本語を勉強しました」と言って、これを見せてきたときに、「私は何とかできました」とか「私はうまくできました」と言われても、一体どれくらいできるのかということについて判断が難しいと思いました。具体的に何が知りたいかと言うと、この人はサポートが要るのか、要らないのかということをおもは思うわけです。ですから、要するに「一人でできた」とか「簡単なことなら一人でできる」とか「ちょっとした難しいことも一人でやれる」とか、それから、「日本人の助けが要る」といったことを我々は知りたいわけです。

そう思って見たときに、「私は何とかできます」と言われたときに、一体どうしたらいいのかと思いました。病気で困っている日系人がいて、「どうしよう」というときに「私は何とかできます」と言われたとします。そのときに我々は一体何をしてあげる必要があるのか、ないのかと考えると分かりにくいんですね。例えば今までに「風邪で病院に行って治したことがある」というようなことが「3. 3 生活上の行為の記録」に書かれていたりすると、「今回は大丈夫か」とか「今回は新型インフルエンザか何かだから、これはやはり誰か説明できる人を付けないといけないのではないか」ということになるわけです。もちろん、これがそういう目的で作られるわけではないのですが…。

○西原主査

そうですね。今の修正案では、「うまくできた」は「うまうできた」で、その次の2段階が「1人でできた」「手伝ってもらった」となるという話になったのですが、学習者の記録としてあった方がよいということですね。その方がよろしいでしょうか。

○小山委員

部外者が見ると、そちらの方が分かりやすいことは分かりやすいと思います。

○西原主査

指導者の記録も「うまくできた」、「一人でできた」、「助けてもらった」とした方がよろしいでしょうか。

○小山委員

そのようにした方が分かりやすいです。本人のモチベーションと言うか、それもやはり抽象的に「何とかできた」と言うよりも、「自分は一人でやれるようになったんだ」とか、「まだまだ助けてもらわなければいけないのか」ということが分かった方が自覚もできるので多少はいいのかなと思います。

○西原主査

私も記憶が曖昧なのですが、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」に「あなた」と書いているところと「先生」と書いているところがあり、自己評価と他者評価をするようになっていますが、この抽象度が違う部分はどのようにしてだったのでしょうか。

○金田委員

この3段階の評価についてでしょうか。

○西原主査

はい。「目的を十分に達成」「目的達成」「もう一息」というのは、抽象度という点について言うと「うまくできた」といった表現に比べて「目的達成」というのは、用語が随分と抽象的だという意味です。

○金田委員

これは、基準を作成したときに、ロールプレイについて評価の提案があり、そこで使われた言葉を用いただけです。ロールプレイの評価も自分で評価するとなると、指導者が評価したものと分かれていましたから、そこで使われている言葉を参考にしました。

○西原主査

そうすると、今の御提案について「うまくできた」「自分でできた」「手伝ってもらった」と変えるとすれば、ロールプレイの評価もそのようにする、つまり連動するわけでしょうか。

○金田委員

その可能性はあると思います。おそらく、助けというのが人の助けなのか、辞書であるとか何か別のツールの助けなのか、いろいろなバリエーションがあると思いますし、それはロールプレイとかタスクによっていろいろなものが出てくると思います。

○西原主査

そうすると、やはりこれに備考欄が必要でしょうか。

○金田委員

はい。そうですね。それは必要で、でも、恐らく、指導者側からというのと学習者側からというのが同じような尺度で、同じ表現を用いるということは、それ自体は可能ではないかと思います。

○西原主査

はい。ですから、そのことを今、小山委員が「1人でできるかどうか」が知りたいという外部の人は思うだろうとおっしゃいましたが、それにはそれで答えられるし、教師との

第三者評価になるような人とのスケールが違う部分については、大丈夫ということです。それから、手伝ってもらえたということの意味をもう少しメモしたい人のために、何かメモ欄をもう一つ付けておくというのもできますね。こういったことはきりがありませんけれども、あった方がいいのでしょうか。もちろん、書きたい人は限りなくかいてしまうのでしようが…。

○金田委員

そうですね。ただ、本当に一言でいいと思います。

○伊東委員

配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の7ページについて「(4)の先生の評価」ですけれども、やはりここは「先生」という言葉ではなく「支援者」、「指導者」にした方がいいかなと思いました。例えばこれは翻訳になりますよね。恐らくこれを学習者が使うには、翻訳しないと難しいと思います。

○西原主査

しかも、最初にだれかが通訳する可能性もあります。

○伊東委員

ええ。そうした場合にはやはり「先生」という用語を使わない方がいいと思います。

○西原主査

「先生」という言葉ではまずいということですね。

○伊東委員

先生の評価というのはダイレクト過ぎないかなと思ったということです。今までずっと避けていましたが、ここで「先生」という言葉が出てくるのか」というのが私の印象の一つです。

○西原主査

先生の感想、指導者の感想、どちらがよいのでしょうか

○伊東委員

なぜ、ここで「先生」という言葉が来たのかなと思います。

○西原主査

これは第三者的、自分一人で行う自己評価と他者評価のコンビネーションで評価を考えましょうという大きなお約束がありました。

○伊東委員

そのときの表現は「先生」でいいのでしょうか。

○金田委員

いえ、「先生」という用語は便宜的に入れてあるだけですので、先ほども「指導者」、「支援者」、「協力者」という用語が出ていることについて、「支援者」については調整をするという話でした。

○伊東委員

分かりました。

○西原主査

じゃあ、これは「指導者」になるのでしょうか。

○金田委員

それが「指導者」ということであるならば、「指導者」でいいと思います。

○伊東委員

それから、「先生の評価」ではなく、「感想」でもよいのではないかと思ったのですが、いかがでしょうか。

○西原委員

先ほど、中野委員は「評価」は「評価」であるという話でしたが、どうでしょうか。

○伊東委員

「感想」でよいのではないかと思ったのですが、それについてはいいです。それはお任せします。

それともう1点、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の13ページにある教室活動の記録です。例の1として「日本語の学習をした教室」とあります。その「学習をした」というように過去形になっているところが少し気になりました。それと「日本語教室で日本語の学習を始めた」という過去形の表現が少し気になりました。これからこのことを使うのであれば、正にこれからのことなので、「日本語の学習をする教室や学校」とか、「日本語を始める年月」という表現にした方がいいかなと思いました。過去形で表現するとなると、これは終わってから書くのかなという印象を少し持ってしまうと思います。

この後を見ると、この「日本語教室で学習している間の大きな目標を書きます」とあります。これから始める、だから目標を書くんだということを考えると、少し細かいようではありますが、これから日本語の学習をする教室で書くのかなと思った次第です。

○西原主査

分かりました。私もこれは「する」にした方がいいと私も思います。日本語の単元は完了形、完了の意味もあるので、日本人はこれは今しているときでも「した」と言っているんですね。だけど、よりはっきりさせるためには「する」にしておいた方が、多くの母語話者の方々の誤解を、今のような誤解を避けることになります。

○伊東委員

はい。それからもう1点、7ページに「行為達成の記録」がありますけれども、やはりこのポートフォリオの5ページの囲みのところにどんなことを目標にするか、私としてはもちろん今の17ページのところに目標を書くということにもなっていますが、目標をしっかりと書くことが大事だと思います

○西原主査

教室活動の記録の部分ですね。

○伊東委員

はい。そこにも目標を書く部分がありますが、やはり最初の段階でどんなことを学習者が勉強したかったかということで、彼らの母語で書いてあるところをチェックできていた方がよいのではないかと思います。

支援者などが、「あ、この人は医療機関のことを集中的に勉強したいんだな」ということが最初に把握できていれば、そのことを話題にして、「じゃあ、今日はどんなことを勉強したいですか」というやり取りが展開できます。最初に書いてあると日々の活動と学習の目標が関連付けられるかなと思いました。恐らく、教室活動では学習者に学習の目標を毎回聞くということがあると思います。せっかくカリキュラムがあり、生活上の行為に通し番号があるので、関連付けられるという点で言うと、ここで学習者にどんなことを勉強した

いか確認するために一覧表を見せて、それでチェックしてしまえば、ニーズに沿った形で学習ができるのでモチベーションも上がるかなと思った次第です。

○西原主査

すみません。具体的には7ページの表を書き変えるということになるのでしょうか。

○伊東委員

配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の7ページのこのところに追加になってしまうのですが、学習したいことということで、ここで少し自己内省しておいて、「これを勉強したい。」ということを書ける形にしておく、後でそのことを振り返るときに自分の達成度が見られるのではないかと思いました。要するにこの表と関連付けたかったということです。

○西原主査

ただ、この配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の中にはその部分はありませんが、配布資料5「能力記述について」を見てくださると、これが学習者と最初に話し合うときに使われるチェックの役割を果たします。

○伊東委員

使うわけですね。分かりました。

○西原主査

7ページは飽くまでもやってからと言いますか、ある程度学習をしてからというのが一番あり得る形です。目標として「この教室であなたはこれとこれとこれを勉強しましょうね」というのを「向こう3週間やりましょうね」というのは、配布資料5「能力記述について」を見ながらチェックするというではないでしょうか。そのときに念のため配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」を見て、「あなた、そう言うけれども、できるかできないか、やってみましょうか」というので、それこそプレースメントテスト的な、プリテスト的な形で7ページからの部分を使うということはあると思います。そういうときはそれが目標になるかどうか。確かにあなたの目標にありますねという合意のもとにチェックが付くということはあると思います。

○伊東委員

構造上、その目的を指導者と学習者、当事者同士が何かの形で話す機会が構造的に含まれているといいなと思ったことと、ポートフォリオにそれが残るようになっていいなと思った次第です。

○西原主査

なるほど。そうすると、配布資料7「能力評価に関する検討の具体的な成果物について（たたき台）」の表について、生活上の行為というところに「合意の有無」みたいなものを作っておくということでしょうか。

○伊東委員

「合意の有無」となるのでしょうか。記録としてやはり、目標があって、それで後で振り返って評価ということになるのかなと思うのですが、いかがでしょうか。その一貫性がポートフォリオで見えないと、目標だけ抜けていることが少し怖いなと思いました。

○西原主査

分かりました。目標をどのように記述するかという点について、伊東委員は日本語教育小委員会ワーキンググループにもメンバーに入っているからなので、そのときにまた御提案いただきます。

ほぼ時間となりました。本日いただいた意見を基に、日本語教育小委員会ワーキンググループで作業を行ってみたい。本日は、お忙しいところをどうもありがとうございました。